

池田市制施行80周年記念 特別展

没後50年

富貴のひと

鍋井克之

その4

歴史民俗資料館では、池田ゆかりの洋画家・鍋井克之の特別展を開催中です。連載最終回は、彼の「文化人」としての姿を紹介します。

文士劇

鍋井は、これはよい、と思ったことは、すぐに実行に移しました。その行動力は、大阪に洋画研究所を立ち上げた、若き日から変わりません。そしてなぜか、彼が動く、いつもコトがすんなり運ぶのでした。

酒もたばこも賭け事もしない。物欲もない。そんな鍋井が絵以外に最も愛したものは、それが芝居です。なかでも歌舞伎は、小学生から親しむ、唯一の道楽でした。中村鴈治郎や実川延若など、彼は「グッチャ（拍子木の音）と眼をむく」役者の顔と芸に美を見出し、歌舞伎を「人間で描いた絵」に例えています。

誰もが「新興芸術」を叫んだ画学生の頃、鍋井は、宇野浩二を介して知り合っ

た片岡鉄兵、澤田正二郎ら十数名と劇団を作るほど、演劇に熱中したことがありますが。それから30年後の1951年、鍋井は再び、役者となりました。

きっかけは、上方役者・市川寿海の後援会「風流会」でした。東京にも負けない文士劇を大阪で、と盛り上がった酒席で「おもしろい」と声を上げたのは、やはり、鍋井でした。

鍋井を座頭に立ちあがった「風流座」には、そうそうたる「日曜俳優」が集まりました。長沖一（脚本家）や竹中郁（詩人）、岸本水府（川柳作家）、小磯良平（画



▶「風流座」で弁天小僧を熱演

家）らをはじめ、山本直治、古家新、船越かつ美（以上画家）、小川月舟（写真家）など、池田にもゆかりのある人びとが寿海らの指導のもと、汗を流しました。松竹の全面バックアップを受け、歌舞伎座と違わぬ豪華なしつらえの中、明るく懸命に演じる素人劇「風流座」は、6回公演まで続く大ヒットとなります。

芸術を身近に

何かを成し遂げよう、という意気に、鍋井はいつも快く手を貸しました。それが、美術界に関することならなおさらです。1957年、池田市民の美術愛好の高まりを受けて、「池田市美術協会」が誕生します。鍋井は、ここでも発起の先頭に立ちました。自らも絵を描いて、準備金を集めたそうです。同年始まった池田市美術展は、市民の美意識向上のため「在住者はかりの仲良し展であってはならない」とした彼の気概により、当時としては珍しい全国公募となりました。

絵画、文芸、演劇、工芸…。自分の関心の赴くままに芸術を愛したら、鍋井は、いつしか大阪に欠かせぬ「文化人」となります。池田市や大阪市からは名誉ある章を受け、晩年になるほど忙しさは増しました。

しかし彼はきつと、それも楽しんだことでしょう。「今少し為政者が芸術に理



▲画室の庭で、絵付け

解を持たねば、美術協会が幾らできても育ちませんよ。口で麗句を唱えるよりも暖かい眼を持つことが必要だろうな」（『週刊北摂朝日』（1959・11・22））。

鍋井は、「文化人」らしく穏やかにくぎを刺しました。

—「何物も顧慮せず」。成果を気にせず、周りにとらわれず、好きなものをまっすぐ、ひと粒の欲も持たず一心にやり通す。彼は、それがもたらす芸術への自由を、最後まで持ち続けた人でした。鍋井が死んで50年。その作品は、なお根強くファンを魅了しています。思うがままに描き、絵を愛する人びとに恵まれた、鍋井はまさに「富貴のひと」でした。

今月は、関連イベントとして、ミュージアム・トークや記念講演会も開催します。詳しくは、14ページをご覧ください。皆様のお越しを、お待ちしております。

◆問い合わせは歴史民俗資料館

☎7511・3019